

*****目次*****

P1	今号の TOPICS	大沢	金呉
P2	仲間たちの近況報告 (1)		
	1 班	木村	良一
	2 班	大原	徹
P3	仲間たちの近況報告 (2)		
	3 班	澤田	章夫
	4 班	橋本	英利
P4	私の玉手箱	今本	芙佐子
P5	専任幹事ご挨拶	中澤	重文
	リレー随筆	青木	茂
P6	絵画コーナー	下浦	美代
	俳句コーナー	山上	恵子
P7	写真コーナー	石川	隆一
P8	自由コーナー	遊上	眞一
P9	樹形ウォッチング	遊上	眞一
P10	新人紹介		

◇自然と文化だより◇

前号は記念ある 10 周年号でした。このタイミングで専任幹事となって初めての機関誌ですが、皆様のお陰を持ちまして、無事発行することが出来てホッとしています。

早いもので今期がスタートして 3 か月が過ぎようとしています。一泊旅行をはじめ各行事を、順調にこなしてきています。これからも皆様の原稿を分かり易く、はっきりと表現できるよう工夫して行きたいと考えています。 Y.T



今号の TOPICS～（新代表のご挨拶）

新代表になって思うこと

代表 大沢 金呉

4 月に代表に就任して 3 か月が経ちました。基本的な運営は科の創生期の伝統を守りながら、過去 2 年間に宮澤前代表が培われました方針と組織の活性化のための様々な取り組みを引き継いでやっていきたいと思っていますが、これを機会に科の運営について課題をいくつか述べてみたいと思います。

2004 年に 19 名でスタートした当科は今年で 15 周年を迎えました。2014 年に 100 名超体制になって以降、ほぼ同じ規模で推移しています。大所帯になることによって科の運営に様々な課題が出てきました。私が入科した 2016 年度には宮澤さん（当時副代表・観察専任幹事）が中心となって中期ビジョン検討会議で、各入科年度ごとの小グループに分かれて議論を重ねた末、理念とその趣旨、今後の方向性、活動内容、組織など多方面にわたる提言を行いました。提言の一部は宮澤代表時代に実現に移されたものもありますが、組織体制や入科条件など今後の検討課題も残されています。

大多数の科員は、現状の組織、運営に大きな不満を感じていないものの、自然と文化科が、将来にわたって継続・発展していくためには、残された検討課題についてさらに議論を進めて、少しずつでも解決していく必要性を感じています。特に入科条件については、自然と文化科が、これからも優秀な人材の宝庫であるべきという「質」の維持と科の将来の運営の担い手の継続的確保という「量」の維持という 2 つの課題を同時に解決していかなければならない難問です。また、組織については、班と委員会という縦系・横系の組織で運営することを前提にしながらも、委員会の所属科員の長期固定化、委員会間の所属人員数のアンバランス、班編成の頻度（2 年ごとの可能性の検討）などの検討課題があります。

何より科にとって大切なことは、次の点と考えています。

- ①参加して楽しい活動を企画すること（積極的に運営に参画）
- ②一人一人がお互いの長所を認め合ってお互いを Respect する組織であること（そして学びと研鑽を欠かさない）
- ③ふっと、「幸せだなあ、生きていて良かったあ」と感じられる瞬間があるスーパー居心地の良い組織であること
- ④社会貢献をするのではなく、世の中に「自然と文化科」を使ってもらって、結果、社会貢献となる活動を発信すること
皆様と創意工夫しながら、全員が切磋琢磨して、参加して楽しく、精神的にも充たされる研究科にしていきたいと思っています。皆様のご理解とご支援をお願いします。

さあ、研究科！

1 班 木村 良一

さあ、研究科！

本科が終わり、何かもう少し学びたいと思って高等科へ。それも終わった。この2年間で何か残ったのか？

植物のことを学びたいと思って、シニア自然大学の門を叩いた。自分では真面目に学習したつもりだ。何を学ばよいか、探るために、平均以上に教育実習にも参加した。しかし、頭の中の引き出しに入っていない。漠たるものを抱いたまま、自然と文化科のお世話になることにした。

月曜日と木曜日の午後、週に2回、テニスで汗を流す。金曜日は主として、自然と文化科の時間。地域サークルが月平均、週に一日。空いた日は、家庭菜園のお世話。約 100 m²あり、これも手を抜くと、雑草に覆われてしまう。今は、ジャガイモ、玉ねぎの収穫と、トマト、ナスなどの夏野菜の育苗も忙しい。

相対評価ではなくて、自分の納得のいく植物の知識を深めていきたいと考えている。



＜アブラチャンの花＞

私の学習フィールドは、甲山森林公園。「もう年なのだから、若い時みたいには覚えられないよ。」と、自分に言い訳を言って、ごまかそうとする自分がいる。これからの私の一番の敵は、これ。この敵をどう撃退するかが一番の課題である。

まあ、一年に新しく 10 種の植物の同定ができればよしとしようと、これも、自分に言い訳を言って、自分を慰める怠け者がある。

怠け者ですが、お付き合い宜しくお願い致します。

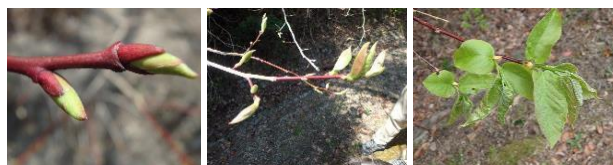
展葉フェノロジー調査に参加して

2 班 大原 徹

展葉フェノロジー調査と言っても、あまり馴染みのない言葉だと思いますが、植物の季節的な変化を気候あるいは気象との関連で調査しようというものです。私が所属している武庫ネイチャークラブでは甲山森林公園を舞台にして樹木の冬芽から葉が生長する過程(展葉)を毎年観察・記録することで、種ごとの展葉時期や気候(温暖化)による影響等を調査しています。

今年は私も参加させていただき、3 月初旬より 6 月末にかけて毎週月曜日、11 種 110 本程度の樹木の定点観測を続けています。

＜ネジキ展葉の様子＞



毎週同じ個体を観察していると固かった冬芽がふくらみ始めて、中からシュートや個葉が出てきて開いてゆく様子がよく分かります。また今春は寒い日が多く、昨年より 1 週間程度展葉が遅れていることも分かりました。個体差も大きく「お隣はもう葉を広げているよ、お前も早く頑張れよ」と声をかけてあげたくなることもあります。

＜シャリンバイ展葉の様子＞



本科・高等科を通じて季節ごとの植物観察を続けてきましたが、1 日に何十種類もの植物の姿を横断的に観察する静態観察が中心でした。今回、展葉フェノロジー調査に参加して同じ場所で同一個体を毎週観察していると、日を追って変化してゆく植物の姿にその生命力を見せつけられ、あらためて動態観察の重要性を実感しています。

＜ソヨゴ展葉の様子＞



6 月で「展葉」フェノロジー調査は終わりますが、このあとも個人的に「開花」「結実」「落葉」観察なども続けることができたらと思っています。

庭の草木

3 班 澤田 章夫

私の住まいは京都府木津川市。
京都府と奈良県の県境からわずか京都に入ったところ。昔奈良ドリームランドがあったすぐそばと言った方がわかっていただけるかも。20 数年前に花好き、植物好きの家内のたつての希望で庭の広いこの地に居を構えました。ただ大阪市内まで 1 時間 30 分以上かかるのは難点。敷地内は所狭しと草木がいっぱい、この時期は特に花盛り。

家内の手入れした草木・花を気持ちよく眺めるのみの私がある種の影響を受けたのか？「自然と文化科」の御世話になっている。

そして我が家の庭、2 月末のシダレウメに始まり、コブシ、ヤマボウシ、3 月末には鳥が運んでくれて自然に大きく育ったヤマザクラが早々と咲く。そしてモクレン、ハナミズキ、クリスマスローズと。

連休の今はナニワノイバラが満開、毎朝カナブンが蜜を吸いにやって来る。他にもモッコウバラ、シラン、シャクナゲ、イブキジャコウソウ、タツナミソウ、スズラン、ストック、ヤブツバキ、テッセン、シャガ、オオデマリ、コデマリ、ワスレナグサ、リュウノギクなどなど。そしてもう少しすればアジサイ、キュウイフルーツ、カキツバタ、ノウゼンカズラが咲きだす。眺めるから鑑賞・観察に変わってきた。葉芽、花芽の成長をじっくりと観る。ケムシの発生にも細心の注意を払うようになった。

植物の生き様をほんの少し気にする様になった私である。



樹木が大好き!!

4 班 橋本 英利

私は樹木が好きです。16 年前から「姫路市自然観察の森」で、ボランティアをしています。ここが私のホームグラウンドです。市民を対象に色々なミニガイドを私たちボランティアが行っています。私は植物観察会を担当しています。ボランティアグループの名前は“ききみみずきん”と言います。このずきんを被ると動物や植物の話し声が聞こえるという日本昔話から名付けました。

もっと植物のことが知りたくて、いろいろな勉強をしました。3 年かけて「森林インストラクター」の資格を取り、“森林インストラクター兵庫”の会で活動しています。また、「グリーンセイバー・マスター」の資格を 2 年かけて取りました。

大変面白かったのは、放送大学に入学（科目履修生）して、「植物の科学」の単位を修得したときです。久しぶりの学生気分を味わい、ゼミ活動で「毎木調査」を行いました。10m×10mの範囲内の樹木すべての樹種や樹高、胸高直径を測り、その森の特性を調べました。

また、「森林セラピー」を行っています。兵庫県の宍粟市で森林セラピストとして、「赤西溪谷」や「国見の森公園」の森林セラピー基地で、森林セラピーガイドをしています。

森に入ると本当に元気になるのか。森林が放出する“フィトンチッド”には、私たち人間をリラックスさせる働きがあります。森の中での呼吸法や瞑想、五感の覚醒（耳に意識を集中して、どんな音が聞こえるか。肌に集中して、風を感じたり、温度を感じたり。足の裏に集中して、道の凸凹を感じる。閉じた目を開け、光や色を感じる）など、森林そのものが、人間を癒してくれます。

シニア自然大学校に入学して、大変勉強になりました。自然と文化科で、もっと樹木のことを知りたいと思います。



文楽に行きましょう！

3班 今本 芙佐子

文楽を見に行きませんか、と誘うと、難しそうだから遠慮しますと断られる事が多い。しかし、文楽は難しいものでも、特別高尚な演劇でもない。文楽(人形浄瑠璃)はもともと庶民のものであり、江戸時代など、庶民が見に行ったり、浄瑠璃を語ったりしていたものである。浄瑠璃は大阪弁で、アクセントは勿論大阪アクセントである。ただ、現在の私達にとって難しく思われるのは言葉が古く、私達が使わない言い回しがあるのと、台詞以外の地の文(説明)は節をつけたり、一音を長々と延ばしたりするので、慣れないと分かりにくいところが、難しいと感じさせる一因ではないかと思う。(文楽劇場ではその助けのために字幕がある。)

さて、私が文楽を初めて見たのは大学の時で、その後、仲の良かった友人と歌舞伎に通う様になり、ほぼ同時に文楽にも毎公演行くようになった。今では、歌舞伎より文楽の方が楽しいと思う事が多くなった。とは言っても公演中何回かは睡魔に襲われるのだが……

[ここで私なりの文楽の解説を！]

文楽は1体の人形を3人で操る世界でも珍しい人形劇である。さらに、台詞や場面、仕草等の解説の部分は全部浄瑠璃でまかなわれる。歌舞伎でも、丸本もの(元が文楽)という外題は浄瑠璃が入るが、役者の台詞と掛け合いのような形になっていて、文楽よりは分かりやすい。

3月の梅田文楽(UMEDA BUNRAKU)は若い演者が中心での少人数公演である。今年は5回目。6公演あり、ゲストが公演ごとに替わり、技芸員の説明をうまく引き出して、初めての人にも分かりやすいようにしている。私の回は劇作家・演出家の上田真誠さんがゲスト。文楽はほとんど知らないとのことで、質問が新鮮で、例えば、「文楽は5人で1人(1体)を遣うのですね」との発言。私は文楽は3行(太夫・浄瑠璃を語る人、三味線、人形遣い)としか考えていなかったで、人形遣い3人と、太夫、三味線を合わせると5人で1人の人物を表現しているということに初めて気づいた。

この3行が揃って稽古をするのは公演前日(リハーサル)の1回だけ。人形遣いが3人揃って稽古する事もほとんどないとの話には驚いた。また、

浄瑠璃に合わせて人形を遣うのでもなく、また人形に合わせて語るのでもない、とは類のない不思議な芸である。演者は互いにちらっと見る程度らしい。ある人が文楽をオペラに喩えたが、確かに、浄瑠璃は歌、三味線は伴奏と考えられる。

先に述べた様に、1体の人形を3人(主、左手、足遣い)で遣うのであるが、それぞれが互いを見て演じるのではなく、すべて主遣い(頭を持つ人)の合図(観客には分からない)で行われる。手や足を使う人は、主遣いの腰の動きや人形の肩の上げ下げなどでどう動かすかを知る。足10年、左手10年等と言われるのも当然と思う。

かつて、呂太夫(英太夫)さんに台本を見せてもらったが、あちこちに血の痕が見られた。それは、のどから出た血で、修行はそれぐらい大変で「60才でもまだ、1人前ではない」と言われる。こんなに大変な修行でも、技芸員の給料は安いのである。世襲制ではなく、大学を出た後や会社員から研修生として入門した人が多い。祖父や父親が人形遣いや太夫であったという学芸員は少ない。この辺りが歌舞伎との違いである。

[さあ、文楽を楽しんで見ましょう!]

私は近松の心中ものよりも、忠臣蔵とか、義経千本桜のような古典物が好きである。心中物は主人公がウジウジ、ナヨナヨとはっきりしない男性のことが多く、見ていてイライラしたり、理解に苦しむ、というのが現在の私達の感覚である。

文楽は人形が演じるので、ある意味で人間より動作が自由であり、人間が出来ない動作をする事が出来る。また、吉田蓑助さんのような名人が使うと人間よりも人間らしく見える。人形は人が持っていないと物にしか見えないが、人が持つと生きているように見えてくる。また、太夫は一人で



いろんな人物を語り分けるのだが決して物まねではなく、そのままの声で演じ分け女性は女性、子どもは子どもに聞こえるのが

不思議である。こんな事を含めて文楽の興味は尽きない。

「皆さん、一緒に文楽を見に行きましょう。」

企画専任幹事に就任して

1 班 中澤 重文

この度、企画専任幹事に就任した中澤重文です。就任に際して最初に考えたことは、中山前企画専任幹事が策定された企画運営方針をどう引き継ぐかということでした。

班幹事を中心とした班内の活動を一層活性化するために、従来ややもすると班幹事に集中していた役割を各委員が夫々分担し、班幹事は班のまとめ役として専任幹事や他班との調整に当たっていただくよう、昨年度から企画運営方針が変更されています。

今年度も昨年度と同様の運営方針で、各委員、班幹事、専任幹事の役割を下記のとおり再整理しました。

1. 各委員の役割

(1) 自班の担当行事

班幹事を中心に担当日の企画行事のリーダーと副リーダーを決め、各委員が役割を分担して企画行事を遂行する。リーダーは一人に集中しないように各委員が分担する。

＜リーダーの役割＞

- ・計画案の作成、下見の実施
- ・バス会社、ボランティア案内人との連絡
- ・案内文・参考資料の作成
- ・出欠調査、出欠表の作成
- ・参加費の徴収、支払い
- ・当日の案内、安全管理 など

(2) 他班の担当行事

行事毎に担当を決め各委員で役割を分担する。

(3) 長期在籍委員等の特例

在籍 10 年以上で 80 歳以上の委員、入科初年度の委員はリーダーを免除する。

2. 班幹事の役割

- ・担当企画行事の遂行に関し、リーダーを補佐する。
- ・専任幹事・他班幹事との連絡調整窓口
- ・バス旅行は 2 班合同実施となるため、班幹事間で相談の上、担当班の運営体制を決める。

3. 専任幹事の役割

- ・委員会行事の遂行管理・予算管理
- ・企画委員会から運営委員会への提言
- ・企画委員会での問題提案対応

企画委員会は新しい役割分担で活動しています。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

大和の日光「内山永久寺」

2 班 青木 茂

「お！ これはすごい。」と思わず声に出してつぶやいたのは、今から 5～6 年前、天理市役所のロビーでのことだった。ロビーには「山の辺の道」沿いにある内山永久寺の伽藍の「復元模型」が展示してあった。驚いたのは、そのお寺の規模である。本堂の前にあったと伝わる池ぐらいいに残っていない現状からは想像もできない広さだった。この「復元模型」からお寺の歴史に興味を持ち、市のホームページを検索した。創建は平安時代後期永久 2（1114）年頃で、鎌倉時代には隆盛を極めたらしい。境内は五町四方（約 500m）ぐらいいあり、江戸時代末期までは、40 有余坊の伽藍を有し、参詣者が常に絶えず、「大和の日光」と謳われたそう。その様子を松尾芭蕉が句にしたためている。「うち山や とざましらすの 花ざかり」

ところが明治の廃仏毀釈により伽藍や寺宝の大部分が売却され、明治 9（1877）年には、本堂の前の池と一部の建物しか残らなかったらしい。貴重な寺宝の一部は海外にも渡ったらしい。

折しもその頃、ボストン美術館展「日本の美術の至宝」が開催されていた。その至宝の中に内山永久寺の仏画も含まれていることを知り、早速美術館に足を運んだ。展示されていた仏画「四天王像」は、遠くからでも人々を引き込む迫力があり、魅力にあふれていた。日本にないのが非常に残念であった。また建物の一部は、大正 11 年に石上神宮に移築された。（国宝 摂社出雲建雄神社拝殿）

明治の廃仏毀釈の嵐は、興福寺の五重塔も 50 円で売りに出された（？）という話があるくらいだから、仕方なかったのかもしれない。

廃寺になった理由は、それだけではなく諸説あるらしいが、内山永久寺が現存していたら、多数の寺宝も散逸せず、多くの人々が参拝に訪れ、「大和の日光」としてさらなる発展をしていたであろう。しかし、緑あふれる山野が残ったこともすばらしい宝物であるかもしれない。池の畔に立つと、ビニールハウスが並んでいるあたりから本堂の麓が見えたような気がした。





俳句・川柳コーナー

俳句

- ・プリンセス名を冠したる薔薇の咲く
- ・奢裁咲いて鞍馬の里に飛ぶ天狗
- ・浴衣着て鍾乳洞に歩を進め

川柳

- ・「怪しい」

統計はそのまま信じちゃ駄目ですよ

- ・「天国」

来世はきっと私が行くところ

- ・「サービス」

気の利かぬ宿でサービス料取られ





オキナグサ（花柱） 5/5

3班 石川 隆一

この公園へ通いだして 15 年位になります。小さな植物園で、毎回全体を散策しています。この時期の植物の様子は時々刻々変化しますね。4/21 と 5/5 に撮影した写真の幾つかをご覧ください。



トキワイカリソウ 4/21



クガイソウ 4/21



フタバアオイ 4/21



ユキモチソウ 4/21



ヒメウラシマソウ 5/5

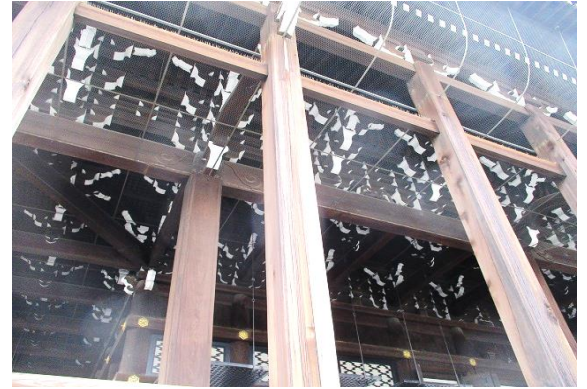


ヒトツバタゴ 5/5

いろは			
解説	若葉を揉んで患部に当てると、止血効果があり痛みも和らぐ。痛みを取るので 痛取です。	早く咲く臘梅ですが、12 月に見たときにはあまりに早く狼狽しました。	よく見ると蓮の花びら 1 枚 1 枚は、チリレンゲの形です。
にほへ			
解説	芽吹いてくる蕾の形はフロッコリーのように、食べるとほろ苦く美味しいです。	葉は、見上げるほど 高いところにありますね。	ヘントウ(扁桃)が標準和名で、アーモンドは別名です。
とちり			
解説	臭気があるのでおこなう、節分の風習です。	名前の由来は、連なった実を千鳥に見立てたものですが、なかなか会えません。	利休梅は、千利休も茶花に好んで使ったそうです。
ぬるを			
解説	名前の由来は、実の形が盗人の足跡を連想させるから、らしいです。	美しい瑠璃色の実がなっていると聞くと、見に行きたいですね。	冬芽の基部にある膜質鱗片は大きく、毛糸のパンツをはいているようです。

適材適所

昔 飛騨高山の棟梁は、建築現場で 大工たちに この諺で適材適所の重要性を教えていました。
土台 クリの木、 柱は ヒノキ。 天井 スギの木、 雨戸は サワラ。
屋根にネズコ かぶせて良し」



檜は 狂いが生じないので、柱に使う。
そして 色や香り、つやも良い。
また粘りがあり 虫や水に非常に強い。

土台には 栗を使いなさい。栗はタンニンをつまみ含み
シロアリや腐朽菌に 侵されにくい。水にも虫にも強い。
そして材は 重くて硬くて粘りがあるので、建物を
しっかりと支えます。



榎（サワラ）は、檜と同じく水や湿気に強い。
そして 檜より軽く 加工しやすいので
雨戸に最適です。



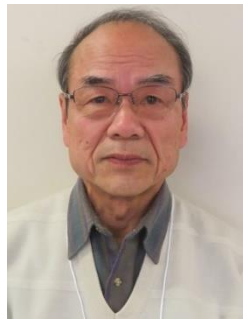
杉の板は 1尺ほどの幅になると 中柵（ナカモク）という
美しく落ち着いた木目が出るので 天井板に使います。
また 杉は断熱・調湿性に優れています。



ネズコは 薄く木目に沿ったまっすぐな板に
割りやすい。そして水に強く 水が滑りやす
いので樽葺（クレブキ）に 使います。

新人紹介コーナー

①：氏名 ②：所属 ③：講座生の期 組
④：住所 ⑤：他の所属 ⑥自己紹介

	①：池田清 ②：1 班副班長・観察 ③：24 期緑組 ④：神戸市 ⑤：「この指たかれ」 「武庫ネイチャー」		①：澤田章夫 ②：3 班・観察 ③：24 期緑組 ④：木津川市 ⑤：「京とおうみ」
⑥：山歩きを頑張った時期もありましたが、樹木や自然を楽しみながら出来ればと思い学習し始めました。少しずつでも理解を深める事が出来ればと思っています。		⑥：活動の広さを認識し加入をさせていただきました。本科アシスタントとうまく調整しながら、活動させていただきたいと思います。よろしくお願いします。	
	①：大原徹 ②：2 班副班長・観察 ③：24 期風組 ④：西宮市 ⑤：「武庫ネイチャー」 「鉱物クラブ」		①：中川一成 ②：4 班副班長・観察 ③：24 期風組 ④：高槻市 ⑤：「鉱物クラブ」 「自探クラブ」 「大阪の歴史遺産を探访する会」
⑥：子供の頃からの都会育ちで、本科・高等科での2年間を経ても、まだ分からないことばかりです。暗中模索の状態ですが、とにかく前向きに取り組んでゆきたいと思っています。		⑥：趣味は、ジョキング、里山歩き、写真撮影、ドライブ等です。自然の生き様を観察して、第二の人生の生き方を探索したいと思っています。	
	①：木村良一 ②：1 班副班長・企画 ③：24 期緑組 ④：尼崎市 ⑤：「武庫ネイチャー」		①：橋本英利 ②：4 班副班長・観察 ③：22 期星組 ④：加古郡 ⑤：
⑥：2013 年から6年間、阪神シニアカレッジ。その翌年、シニア自然大学校緑組 24 期。続いて高等科 17 期。どこでも良い仲間ができたことに感謝している。		⑥：私は兵庫県の加古川市と明石市の間にある播磨町から来ています。JR大阪駅まで 1 時間以上かかり、大阪の地理にも暗いため、観察会場が遠い場合は参加できないことがあります。お許しください。	



皆様のお陰を持ちまして無事「自然と文化たより 41 号」を発行することが出来ました。これからも工夫を凝らして楽しい機関誌にして参ります。応援よろしくお願いいたします。